

高部城

歴史ある建物が立ち並ぶ高部宿の北西に、標高二九メートルの山頂上に築かれた中世の城、高部城の跡があります。

高部城は、佐竹氏七代義胤の五男・景義を祖とする高部氏の居城として築かれました。景義は一二六〇〜七〇年代頃の

生まれと推定されます。景義には、義直と成義という二子がいて、義直が父の跡目を継いで高部を、成義が檜沢を領しました。

これ以後、南北朝時代から数代にわたって高部氏はこの地を治めました。



▲高部景義の墓

しかし、応永十五年（一四〇八）頃から、百年に及ぶ佐竹氏最大の内紛である山入の乱が起ると、高部城は明

応九年（一五〇〇）前後に山入義藤に落とされ、その所有となりました。乱後、城を追われた高部氏は上檜沢城に移りました。

一方、勢力を盛り返した佐竹氏は永正元年（一五〇四）、山入氏義から太田城を奪還しました。太田城から逃れた氏義は小田野氏を頼り高部城に入りしました。小田野氏は、当時義冬が小田野城を、義村が小川城（別名頃藤城、大子町）を領していました。佐竹氏とも通じていた小田野義正は高部城を急襲し、山入氏義を討つたといわれています（『美和村史』）。



▲高部城遠景

高部城はその後、佐竹氏の分家である東家が領し、下野への守りを固める拠点としました。

佐竹義篤書状（十六世紀前半）には「野口・東野・高部・小舟之者共」「小瀬・檜沢之可為衆候」など、市内の主だった城郭を拠点とする武士たちを下野の那須氏との戦に差し向けるように、との要請が記されます。

この古文書を裏付けるように、これまで地元の伝承でしか知られていなかった東野城（市内東野）について、一昨年の調査でその存在が確認されました。他の城についても、これまで確認されていたよりも大規模であったことが近年の調査で次々にわかってきました。

常陸・下野の国境に近いこともあり、那須への軍勢を派遣するにふさわしい規模の城郭だったのでしよう。

◆高部城の構成

高部城は山方と馬頭を東西に結ぶ街道と大子へ至る南北に通じる道が丁字に交わり、南に緒川が流れる場所に築かれました。城の北側と東側は急峻な斜面となっていて、西側と南側には切岸や堀切を多用した防御施設が築かれました。平坦部である曲輪は南北に八つほど連なっています。特に、最北端の三日月状の曲輪を二重に取り囲む堀は見事なものです。

また最高所にある主郭は縦・横ともに八〇メートルほどの広さを持ち、軍勢の駐屯に十分堪える広さがあります。



▲高部城の堀切

そして、東の山麓には「根古屋」の小字が残ります。根古（小）屋は一般に城主や家臣の居住地を示す地名で、そのような居住区が存在した可能性があります。その北には「木ノ出」「木ノ出口」という小字もみられ、宿場への出入りを規制する木戸（城戸）の存在が想像できます。近世に在郷町として発展した高部宿は、中世には高部城の構えの中に包摂された町場だったことが推測されます。

※茨城大学中世史研究会編『高部館跡とその周辺 現況調査図』二〇〇九を参考にしました。

歴史民俗資料館大宮館

52 | 1450